

# 「デジタル連絡帳」による家庭と特別支援学校の教育支援連携活動の実践

— 「デジタル連絡帳」アプリと活用システム —

特別支援 ICT 研究会 代表 中川宣子

キーワード：「デジタル連絡帳」，教育支援連携活動，特別支援教育，つなぐ

## 1. 従来の課題

特別支援教育における家庭と学校との連携・協力は、子どもの成長・発達に大きな教育効果をもたらす。なぜなら特別支援教育は、子どもの将来の自立を目指した身近自立や基本的生活習慣に関する「日常生活の指導」や「自立活動」といったように、子どもが日々の生活の中で必要としている内容に即した教育を行っているからであり、そのためには、子どもの家庭生活と学校生活において、保護者、教師、学校が三位一体となって連携・協力し、指導・支援していくことが重要であるからである(図1)。

では、保護者、教師、学校が、三位一体となってよりよく連携・協力するためには、何が必要となるかであるが、その一つとして、日々の生活における「子ども情報の共有」があげられる。

ところが、従来から様々な方法で、保護者、教師、学校間における情報発信が行われているにもかかわらず、それぞれの立場の違いや言葉による誤解、情報不足、不安、不信、情報の一方通行といったことが現実起こっていた。

そこで、日々の生活におけるより正確な子ども情報を、保護者、教師、学校間で共有できるように、そして共有した子ども情報を指導・支援に活用できるように、つまり、家庭と学校における教育支援連携活動を強化するための具体的な方法が求められた。

## 2. 目的・目標

### 「デジタル連絡帳」開発と活用システムの構築

特別支援 ICT 研究会は、子ども達の成長・発達のためのより適切な指導及び必要な支援を行うことを目的に、家庭と学校における教育支援連携活動を強化することを目標として「デジタル連絡帳」アプリの開発と活用システムの構築(以下「デジタル連絡帳」と記す)を試みた。(図1)

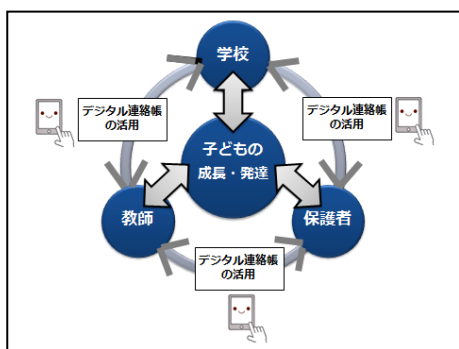


図1 保護者、教師、学校の三位一体の教育支援連携活動

この「デジタル連絡帳」とは、日常の子どもの生活情報を共有するアプリケーション・システムであり、家庭生活や学校生活での子どもの様子を、文字、写真、動画、音声、イラストによって、リアルタイムに送受信することで簡単に子ども情報を可視化でき、保護者、教師、学校間で、より正確な子ども情報を共有できる。さらに「デジタル連絡帳」に日々蓄積されていく情報

は一元管理でき、データ化した情報をいつでも閲覧可能、個別の指導計画や授業計画等へと活用できるシステムを備えた(図2)。「デジタル連絡帳」の活用により、保護者・家族と教師、学校が三位一体となって連携・協力し、子どもの成長・発達の支援強化をはかる。

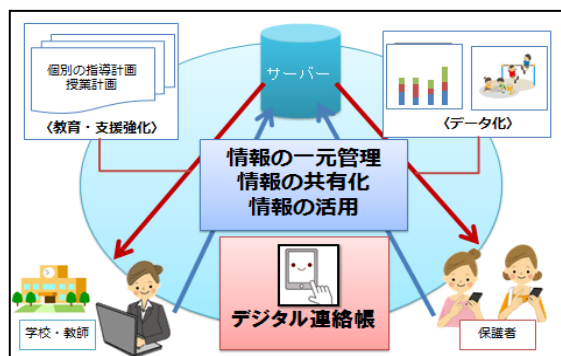


図2 「デジタル連絡帳」アプリと活用システム

## 3. 実践内容

### 「デジタル連絡帳」の実践

2015年1月～12月の期間、A特別支援学校(知的障害)小学部低学年(計8家庭)において、「デジタル連絡帳」の活用実践を行った。写真1～8は、「デジタル連絡帳」の画面の一部である。



写真1 「デジタル連絡帳」起動画面



写真2 家庭通信、学級通信 選択画面



写真3 カレンダー表示

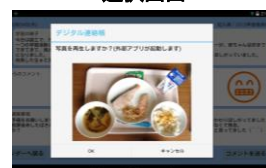


写真4 「写真」「動画」画面



写真5 「家庭通信」画面



写真6 「学級通信」画面

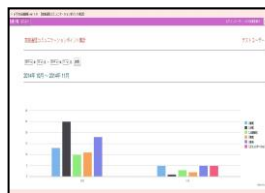


写真7 情報活用画面  
コミュニケーションポイント



写真8 情報活用画面  
健康状態

## 4. 成果

### (1) 子どもと子どもをつなぐ情報の教材化

「デジタル連絡帳」の成果の一つに、「子ども情報の教材化」がある。A 特別支援学校小学部では毎朝、子どもの健康状態や家庭での様子を情報共有するために、子ども達と行う「朝の会」の学習場面で「連絡帳紹介」の時間を設定している。従来は、子ども情報を教師が口頭で紹介していたために、主に教師間の情報共有の場となっていた。ところが、「デジタル連絡帳」によって家庭と学校間で送受信される子ども情報は、写真や動画、音声を活用できるようになり、自分や友だちが主人公となった映像を視聴でき、子どもと子ども間での情報共有ができるようになった。子ども達は「自分(友だち)が映っている」ことに強い興味・関心を示し、自らテレビの前に集まってくる(写真9)。そして、映し出された映像を指さして、「見て！見て！」と、その内容を、友だちや教師に必死に伝えようとする。コミュニケーション学習の場である(写真10)。そしてその情報の内容は「すごい！」「頑張ったね！」と、友だちや教師達からほめられ、認められる場となる。このように毎朝の「デジタル連絡帳紹介」の時間は、子ども達の興味・関心、コミュニケーション力、自尊心を高め、次の学習意欲へとつながった。「デジタル連絡帳」による子ども情報は、毎日の成長変化を捉えたリアルタイムな子ども情報であり、子どもと子どもをつなぐ貴重な学習教材になった。



写真9,10 朝の会「デジタル連絡帳」紹介の学習風景  
(A 特別支援学校 小学部低学年)

### (2) 家族のつながり、絆

成果の二つ目は、「家族のつながり、絆」である。「デジタル連絡帳」の活用により、学校や家庭での子どもの学習状況は、タブレットPCを開くだけでいつでも、リアルに見られるようになった。そのため、母親はもとより父親、祖父母、兄弟姉妹、親戚と家族皆が、子どもの日々の学習に興味・関心を持つようになり、家族の一員である子どものことを「デジタル連絡帳」をきっかけにつながり、常に話題にするようになった。これにより、家族の絆は深まり、支援連携が強化され、子どもの成長・発達につながった(図3)。

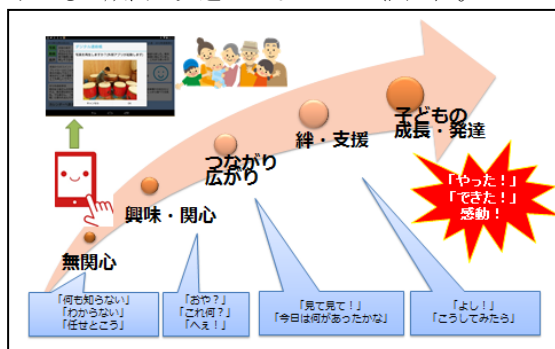


図3 家族のつながり、絆

### (3) 子ども、保護者、教師をつなぐ教育共生

成果の三つ目は、「教育共生」である。「デジタル連絡帳」で送受信される写真や動画を分析してみると、子どもが家庭生活や学校生活で興味・関心のあることや、子どもの特技、子どもが頑張ったことというように、子どもの良い所についての話題が圧倒的に多い(写真11, 12)。これは、保護者も教師も「デジタル連絡帳」の活用により、日々の生活の中で、子どもの良い所探し=美点凝視を常に意識するようになったことのアラわれである。このことは、子どもを教育・支援する上で、非常に重要なことである。日々何気ないしぐさや生活の中にも、子どもの成長・発達の姿はある。このことを保護者や教師は、「デジタル連絡帳」を活用することによって気づき、発見し、子どもを認める姿は、保護者、教師の成長の姿である。この毎日の積み重ねは、子どもの成長・発達と共に、保護者も教師も、教え、育て、育てられ、教えられ、共に生きる、まさに教育共生の姿である。



写真11,12「家庭通信」お手伝いをしている様子  
ハンバーグ作り、鍵閉め

## 5. 今後に向けて

「デジタル連絡帳」は、今後も活用範囲を広げ、様々な面で、人と人、人とのをつなぐツールとしての活用が考えられる。日々蓄積していく子ども情報は、個別の指導計画作成や教育支援計画の策定、授業づくり、カリキュラム編成へと活用できる。また現在「連絡帳(紙ベース)」を使用している特別支援学校、特別支援学級、保育所・幼稚園、放課後等デイサービス、福祉施設、医療といった子どもを中心とした関係諸機関とつなぐこともできる。

私たちは常に、子どもの成長・発達を願っている。子どもを取り巻く環境が、子ども情報を正しく理解し合い、互いに知恵を出し合って行動し、よりよく連携・協力することで、子どもの成長・発達は着実に教育・支援することができる。

「デジタル連絡帳」が、子どもの成長・発達のための教育支援連携活動を実現する一つのツールとして、さらに役立てられるよう、今後も実践研究を継続していきたい。

### 【謝辞】

「デジタル連絡帳」アプリ開発及び活用実践において、公益財団法人パナソニック教育財団、株式会社Switch、京都教育大学附属特別支援学校には、多大なるご協力をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

### 【特別支援 ICT 研究会ホームページ】

URL : <http://specialsupport-ictlabo.jimdo.com/>